第46回日本保育学会報告　I

国際化時代と幼児教育

宮原　和子

戦後五十年、著しい経済成長を遂げた日本は、いま大きな岐路にたたされている。冷戦構造の崩壊、一千三百億ドルにものぼる貿易黒字、貿易摩擦、PKO、環境問題など、どれ一つとっても、国際的な理解と協調なくして解決できない問題である。こういった状況のなかで、日本をとりまく人や物、情報のボーダーレス化は、二十一世紀に向け、ますます大きく拍車がかかっていくであろう。このような時代に生きる子どもたちの教育も、自ずからこれまでとは異なるものでなければならない。日本において「指導」から「援助」への転換を求める、新しい『保育所保育指針』と『幼稚園教育要領』が生まれたのも、こうした時代の要請に応えたものである。家庭教育においても、時代に即応した幼いときからの教育が求められる。

二十一世紀への道

顧みれば、わが国は、明治以来、一貫して、欧米に追いつけ、追い越せの国是のもと、近代化への道を走り続けてきた。その一つは、軍隊を強くし、もう一つは、産業を興し、国を豊かにすることであった。当然、教育においても、教師が主導的な役割を果たし、生徒をひっぱっていき、そこから一人でも多くの能力のある人間を養成する「教師指導型」の教育が主眼となった。そこでは、基本的に、子ども一人ひとりの能力や興味といった個の存在は無視されたのである。

しかし、富国強兵の歴史は、昭和二十年の敗戦によって幕を閉じる。さらに、産業を興し、近代化への歩みを推し進めてきた政策も、敗戦によって大きな打撃をうけた。欧米に追いつけ、追い越せの政策は、また、一からの出直しとなった。

灰燼に帰した国土を復興し、経済を立て直し、すべての国民が食べていけるためには、ここでもまた、欧米に追いつく努力をすることが最大の悲願となった。明治の近代化に始まった「欧米に追いつけ、追い越せ」の思想は、敗戦によって、弱まることなく、さらに続けられていったのである。教育においても、社会や教育の民主化のなかでも、「追いつけ、追い越せ」教育の教師指導型の教育は、敗戦という国家の変貌を大きく変えたできごとに遭遇したにもかかわらず、明治以来一貫して変わることなく、今日に至ったのである。そしてそこから、一定の能力をもった人材が養成され、新しい製品を次々とつくり、輸出のパイオニアたちが育っていったのである。

日本では、いろんなところで、「頑張ってね」ということばが使われている。アメリカなどの諸外国では、母親がナースリ・スクールなどで子どもを送ってきたり、迎えにきたときは、「楽しんで」「楽しかった?」という。母親にとって子どもが園で楽しく“enjoy”することが最大の願いである。日本では「頑張ってね」とお母さんは激励して子どもを送りだす。毎日毎日「頑張って

ね」と送り出される子どもは一体どうなるのだろう。日本の母親も子どもに毎日頑張ってきてもらいたいと本気で考えているわけではない。心の底では、子どもの一日が楽しいことを願っていることであろう。しかし、慣用的にも「頑張ってね」ということばが幼い子どもの世界にまで入り込んでいるのは、まさしく「追いつけ、追い越せ」の思想の産物だと思われる。いつも「頑張ってね」といわれていると、その子どもは、それに馴化し、それが刺激としての意味を失い、本当に頑張らなければならないときに、その意味をもたなくなる。

こうして、明治から百年とわずかな歳月を経て、ドル換算の一人あたりの名目GNPでは、アメリカやイギリスを凌駕し、日本から世界に向かって輸出される製品は、いわゆる、「貿易摩擦」を生み出すものとなった。日米の摩擦一つとっても、貿易摩擦だけだはなく、非関税貿易、文化摩擦にまで及んでいる。これらの摩擦を解消し、日本が国際社会の一員として生きていくためには、日本人そのものが、その環境で生きていくことのできる日本人に生まれかわっていかなければならない。国際的な理解と協調なくして、これからの日本は世界のなかで生きていくことができないのである。「協調」とは、ただ単に仲よくするということではない。利害の異なる者が互いに協力しながら、問題を解決していくことである。そこでは、その問題について、主張すべきところは主張し、相手の立場に立って譲るべきところは譲る、ということである。そして、お互いが協力しながら、問題を解決していくことである。この「協調の精神」とそれを達成する技術や方法が、これからの日本に最も求められるものである。そういった精神や技能は、これまでの「追いつけ、追い越せ」の画一的な教育からは生まれてこない。幼児期の教育において、「個」を大切にする「援助としての保育」が求められるのも、そのためである。

子ども一人ひとりの『個』を大切にする保育と教育は、二十一世紀の国際化のなかで日本が生き残れるかどうかの国の存亡をかけての問題として提起されたといっ

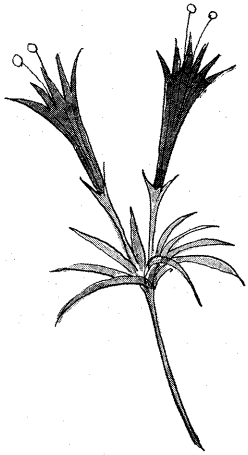
ても過言ではない。

ケンブリッジのナースリ・スクール

簡単に『個』を大切にする保育、「援助」としての保育といっても、ことは簡単ではない。その証拠に、戦後の大きな民主化の波のなかでも、画一的な教育の中味を変えることができなかったことからも明らかである。一九九二年の夏、わたくしは、イギリスのケンブリッジにある公立のナースリ・スクールを訪ねた。

そのナースリ・スクールは、人口十万のケンブリッジ市の中心部から少しはずれた、かなり住宅が密集したところにある。四歳児を対象にしたそのナースリ・スクールは、午前のクラスと午後のクラスにわかれ、それぞれが二つの教室で保育をおこなっている。

このナースリ・スクールの保育は、オープン・スクールの保育である。一つの教室は、ままごとやペインティングのような創造的な遊びや砂遊び、水遊び、粘土あそびなどができるようなコーナーが設けられている。どちらかといえば、動的な活動をする教室である。もう一つの教室は、床で積み木やレゴなどをして遊ぶコーナーや、絵を描いたり、コンピューター・ゲームや、パズ



ル、ストーリー・コーナーといった静的な活動をおこなう教室である。

ここのスタッフは、全部で九名である。園長先生ともう一人の先生は、四年制の大学を卒業し、学位をもっている、いわば、正規の先生である。さらに、ナースリ・ナースという保育者養成機関において二年の教育を受けた二人の補助教師がいる。その他に、障害をもった子どもが四人いるために特別に派遣された教師や、園長が来客や外出などで保育にあたれないときの要員としてパートの教師がいる。それに現地の中学校を卒業し、将来保育者になることを考えている十五歳の青年男女が一名ずつ来園し、保育の手伝いをしている。加えて、子どもの何人かの母親が教室のなかで、自分の子どもをはじめ、まわりにいる何人かの子どもたちと会話をかわしている。

まず教室にはいって、日本の幼稚園や保育園のクラスと大きな違いを感じるのは、教室にいろいろな、たくさんの種類のおもちゃが置いてあることである。一つの教室のなかに、あらゆる種類のおもちゃや教材がところせましと置かれている。遊ぶおもちゃでいっぱい、という感じである。教室は、子どもにとっては、なんでも好きなおもちゃで遊べる、楽しい場所である。しかし、おもちゃや遊具は、ただ雑然と置かれているのではない。遊びのコーナーがつくられている。教室の一方の隅の方には、コンピューター・ゲームができるようにゲーム用のテレビが置かれ、大きな円形のテーブルでは、子どもが椅子に座り、絵を描くようなコーナーが設けられている。三々五々はいってきた子どもは、自然と自分の好きな遊びを始める。子どもは母親と一緒にいたそれまでの家庭の生活よりもっと楽しい遊びを求めて、自然に遊びに入っていく。絵を描く子どももいれば、ウォータータブで水遊び、砂遊びをする子どももいる。一方のコーナーでは、積み木遊びをしている。

この二つの教室は、日本のように、二つの違ったクラスとして区切られてるのではない。四十名の子どもが、廊下でつながれたこの二つの教室を自由に行き来し、遊

んでいる。しかし、平均して、ほぼ二十名の子どもが、一つの教室で活動的な遊びをし、もう一つの教室では、静的な活動をおこなっている。

このナースリ・スクールでは、日本の保育園や幼稚園でよくみかける、一斉に交わされる「先生、おはようございます。みなさん、おはようございます」といった朝の挨拶は一切おこなわれない。降園のときも同じである。九時頃になって、母親や父親につれられてきた子どもは、教室に入るとすぐに、自分が遊びたいコーナーやおもちゃを見つけて、遊び始める。教師たちは、その週のスケジュールにそって保育が始まる前に、その日の子どもの活動の場を準備する。教室に次々に入ってきた子どもは、きわめて自然にその日の活動のなかに入っていく。そこには、号令や命令、一斉に行動するといったものは、ほとんどない。十時半頃のおやつもそうである。日本の幼稚園や保育園のように、クラスの子どもが一緒に集まって一斉におやつをとるというようなことはない。その時間になると、給食の先生が子どもが教室で遊んでいるときは教室の中央部の机の上に、子どもが園庭で遊んでいるときは、園庭の木陰の下の木のテーブルの上に置いておく。子どもは飲みたいときに自由にやってきて、そこでミルクを飲み、また、自分の遊びに散っていく。先生は、子どもを見守り、子どもの遊んでいるコーナーをまわって遊びを手助け、会話を交わす。

日本のいままでの保育の形態からすれば、「これ、本当に、教育をやっているの？」といえそうなものである。しかし、そこには、しっかりとした保育のポリシーがながれている。それは一人ひとりの子どもの個性や興味、能力に応じた保育をするということである［注1］。いやむしろ、これこそが本当の教育であるという思想である。

ここで、このナースリ・スクールの保育がすべてよい、といっているのではない。しかし、文化や社会が異なれば、保育や教育のあり方も大きく違ってくることは事実である。いまから四十数年まえの敗戦を契機に本当に考えなければならなかった教育の意味を、ここでもう

一度真剣に考えなおさなければならない。教育とは、一人ひとりの子どもの成長を保障することである。一人ひとりの子どもは、その能力において、興味において、性格において、発達する速度において、一人ひとりが異なるものである。個の存在とはまさにそういったことである。これからの国際社会のなかで生きる日本の幼い子どもたちの教育について、これからの時代にふさわしい幼児教育の構築が求められる。

日本保育学会シンポジウム

一九九三年五月、さわやかな青空の下、福岡教育大学において「国際化時代と幼児教育」と題する日本保育学会企画によるシンポジウムがおこなわれた。このシンポジウムでは、シンポジストとして津守　真、李　相琴、柴崎　正行、指定討論者として金田　利子、藤岡　佐規子の各氏を迎え、宮原の司会で、およそ六百名の参加者であふれるなか、真剣な討論がおこなわれた。

津守氏は、「国際化と教育」の問題について、子どもの教育こそ、世界平和への道につながるものであることを力説し、保育実践者が国際化の意味を考え、保育者自身が国際的な交流を経験し、さらに、国際化社会へ向け

ての保育者の再教育の重要性を訴えた。

李氏は、「いまなぜ、国際化なのか」という反問を提起し、幼児にとっては外国はすでに身近な環境として存在し、その国際的な環境と時代に則した人間像を探り、国際化時代の幼児教育とは、決してことばや洗練されたマナー、外国の歴史や文化、あるいは諸般の事情に関する知識といったものではなく、むしろ外国に対する親近感や外国を理解する温かい心情であり、平和への道は、幼児教育においてつくられることを強調した。

柴崎氏は、国際化時代に生きている子どもに対して、汚いもの、醜いものはいや、人とのかかわりはいやといった気持ちを捨て、外見やことばの違いを超えて積極的にかかわる気持ちを育てることの大切さを説き、そのための幼児教育関係者や行政上の問題等について言及した。

これらの問題提起に対して、金田氏は、これからの時代において、文化を越えた共通性、交流をどのようにすればよいかを指摘し、さらに藤岡氏は、実際に外国の子どもを受け入れている保育園の実例を紹介し、ことばの問題を超えて、相手を受け入れる心情を育てる大切さを訴えた。

さらに日本保育学会においては、大妻女子大学教授、平井信義氏による「子どもたちの今と未来－国際性を育てる保育」と題する講演もおこなわれた。このなかで平井氏は、子どもにとっての国際性とは「意欲」と「思いやり」を育てる保育を目標に、ボーダーレスの考え方にそった保育、はっきりとイエス、ノーが言える子ども、ユーモアのセンスをもち、相手の国の文化を理解し、それに共感できる人間を育てることをあげ、そのためには、保育者自身が地球的規模をもって考えることの大切さを求めた。

冒頭に述べたごとく、いま日本は一つの転機に立っている。しかも、日本がこれからの国際化社会のなかで進むべき道は、決して平坦なものではない。しかし、ここ

で銘記すべきは、いかなる困難な問題も、われわれ人間がつくりだしたものであるということである。政治を動かす人間も、国際貢献に身を捧げる人間も、そのすべては教育によってつくりだされたものである。すなわち、日本で、いや世界において起こるすべての問題は、教育の問題に帰結されるものである。おそらく、二十一世紀に生きる人間をつくるのも、これからの教育いかんである。しかも、乳幼児期の発達は、きわめて可塑的である［注2］。このことから、人間形成の根幹をつくるのは、幼いときの教育であるということである。

国連のボランティアとしてカンボジアで凶弾に倒れた中田君も、その行動のルーツは、子どもの頃のポーランドでの生活にあったと思われる。ユダヤ人を虐殺したアウシュビッツの悲劇を体験したことが、戦争の残虐さを憎み、平和を希求し、その後、一つの国家や社会を越えて、地球人として生きようとした中田君の原点ではなかったかと思われる。

二十一世紀は、まさしく、日本が世界のなかで、世界との協調のなかで、生きていかなければならない時代である。その時代はそこまできている。その時代に生きる、その時代にふさわしい人間を育てるために、その根幹としての幼児教育をここでもう一度考えてみなければならない。

（近畿大学九州短期大学）

［注1］宮原和子・宮原英種編著『母親と保育者のための応答的保育入門』蒼丘書林　一九八七

［注2］宮原英種・宮原和子著『愛情だけでは子どもは育たない―ハント博士の知的乳幼児教育』くもん出版　一九九二